



アメリカ合衆国の地誌を学ぶ

中央大学附属中学校・高等学校 松下 直樹

ウォーミングアップ！

アメリカ合衆国には多様な自然環境が存在する。それは、アメリカ合衆国の地誌を理解する基盤の一つである。

「●変化に富む地形」の設問1では、地図帳を積極的に活用させ、地名だけでなく、アメリカ合衆国における自然環境の地域差や地形の全体像を把握させる。

「●東西で異なる気候」の設問2(1)では、図2と雨温図A～カを照らし合わせることで、気候の特徴を概観させる。自然災害について取り上げた設問2(2)では、2005年に発生しミシシッピ川の河口に位置するニューオーリンズを直撃したハリケーン「カトリーナ」について言及したい。なぜ、ニューオーリンズでは、州政府の事前の避難勧告があったにもかかわらず、1,500人をこえる犠牲者が出てしまったのか。犠牲者の居住分布は、おおむねニューオーリンズ市内の貧困地区と一致しており、モータリゼーションの進展したアメリカ合衆国にあって自家用車を持たず、逃げる術のない貧しい人々が犠牲になった。この災害は、アメリカ合衆国にはびこる貧困や不平等といった社会問題を浮き彫りにしたのである(二村、2011)。

ステップアップ！

アメリカ合衆国は、昔も今も、世界各地から多くの移民を受け入れてきた。移民の国や多民族多文化社会は、この国の代名詞となっている。

「●移民と多民族多文化社会」の設問3では、図3から時代によって大きく変化した移民の出身地について把握させる。ここでは、近年、アメリカ合衆国において急増するヒスパニックの影響力が日増しに大きくなっていることに言及したい。そのことを知るには、『メキシコ人のいない日』(セルヒオ・アラウ監督、2004)がわかりやすい。この映画は、カリフォルニア州からヒスパニックが突如としていなくなり、経済や社会が大混乱に陥るといった物語で、アメリカ合衆国は都市の経済や農業生産の面において、ヒスパニックに大きく依存する社会であると認識させてくれる。

移民の出身地の変化について把握させたところで、設問4(1)(2)では、ナショナルなスケールで人種・民族の居住地域を時代背景とともに概観させる。もともとアメリカ大陸には、先住民(ネイティブアメリカン)が自然環境に適応しながら生活していた。しかし17世紀以降、北西ヨーロッパからの移民が勢力を拡大し、開拓の進行につれて、西部の不毛地に追いやられ、図4からもわかるように、

現在は限られた居留地での生活を余儀なくされている。また南部にアフリカ系が集中するが、19世紀中ごろまで、アフリカ系の黒人奴隷に依存したプランテーション農業が行われていたことが背景となっている。そして、メキシコと国境を接する南西部や旧スペイン領でカリブ海諸国に近いフロリダ半島にヒスパニックが、さらに、太平洋岸にアジア系が集中する傾向にある。

一方、設問5(1)(2)では写真1を見せながら、ロサンゼルス大都市圏を例に、ローカルなスケールで多民族多文化社会について具体的に考察させる。写真1について、まずは生徒一人ひとりのイメージを膨らませてから、少人数のグループで自分の考えや、そう考えるに至った理由を共有させ、発表させてみるとよい。少し難しいようであれば、写真1中のメキシコ国旗に注目させるなど、適宜ヒントを与えてゆく。設問5(1)(2)のような問いを授業で扱う際は、正解か否かが重要なのではなく、生徒一人ひとりが意見を持ち、それを自分の言葉で表現することの方が重要であるから、いろいろな考えが出てくるのが望ましい。

ところで、教員が現地を訪れたことがあれば、その経験を生徒に紹介することは、地誌学習の醍醐味の一つであろう。筆者は、オルベラ街やリトルトーキョー、チャイナタウンなどロサンゼルス大都市圏に位置するエスニックタウンをいくつかフィールドワークしたことがある。そのときのエピソードを、自ら撮影した写真や、オルベラ街のみやげ屋で購入したメキシコ人レスラーのマスク、リトルトーキョーの紀伊国屋で販売されていた『羅府新報』、チャイナタウンで手に入れた中国語のパンフレットなどを提示しながら授業で紹介した。すると、ある生徒から「ロサンゼルスにいながら世界中を旅行しているみたいだ」というなんともおもしろい反応が返ってきた。ロサンゼルス大都市圏には、オルベラ街のほかにも10か所近いエスニックタウンが存在する。まさに、この生徒の言葉どおり、ロサンゼルスは1日あればちょっとした世界旅行に出かけられてしまうような多民族多文化ひしめく場所なのである。

ジャンプアップ！

アメリカ合衆国の工業や農業は、時代とともに大きく変貌を遂げただけでなく、明瞭な地域差を有している。世界最大の工業国であり、農業国であるアメリカ合衆国が、世界に及ぼす影響力は大きい。

「●先端技術産業の発達と工業地域の変化」の設問6で

は、スノーベルトとサンベルトの対比を念頭においている。**設問6** (1)では、アメリカ合衆国の工業地域の変化を理解させる。ピッツバーグやデトロイトなど太平洋岸から五大湖沿岸にかけての工業地域は19世紀から20世紀前半にアメリカ合衆国の経済発展を牽引した。しかしこの地域は、アメリカ合衆国の産業構造が第2次産業から第3次産業へと変化するなかで、日本やヨーロッパからの低価格の鉄鋼や自動車などの工業製品の流入、老朽化した施設や合理化の遅れ、労働者の高い賃金などがあだとなり衰退してしまった。一方で、1970年代の石油危機によってエネルギー消費の面で温暖な地域への関心が高まったこと、未組織労働力が豊富に存在したこと、州政府が企業誘致に向けさまざまな優遇措置を用意したことなどを受け、カリフォルニア州のシリコンヴァレーなど先端技術産業の中心地が新たに誕生した(矢ヶ崎、2007)。

前者は、**設問6** (2)の**図5**に赤色でなぞらせた北緯37度より北に位置し、スノー(フロスト)ベルトとよばれるのに対して、後者は、北緯37度より南に位置し、サンベルトとよばれる。

「**●農業地域と食料生産**」の**設問7**では、**図6**より適地適作様式で知られるアメリカ合衆国の農業形態の地域差を把握させる。アメリカ合衆国の自然環境ならびに農業地域は、**設問7** (1)の**図6**に赤色でなぞらせた年降水量500mmにはほぼ相当する西経100度を境に、東西で特徴が著しく異なることに気づかせたい。乾燥した西部には、粗放的な放牧地や灌漑農業地帯がみられるのに対して、湿潤な東部では、西経100度付近に小麦、五大湖周辺地域に酪農地帯、南部に綿花栽培地域が広がる(矢ヶ崎、2010)。以上を**設問7** (2)で確認させる。

設問8では、食料基地と称されるアメリカ合衆国のダイナミックな食料生産について考察させる。**設問8** (1)では**表1**にもとづき、大豆ととうもろこしの生産、肉牛と豚の飼育の上位5州に色をぬらせたうえで、**設問8** (2)で、それらを二つのグループに分類させる。この作業を通して、大豆ととうもろこしの生産と豚の飼育の上位5州がほぼ一致していることに気づかせたい。具体的には、アイオワ州やイリノイ州、インディアナ州、ミネソタ州であり、これらの州は、コーンベルトに位置する。コーンベルトでは、とうもろこしや大豆といった飼料作物の輪作と家畜飼育を組み合わせた混合農業が伝統的に行われてきた。

一方、肉牛の飼育地域については、かつてコーンベルトでとうもろこしを飼料に肥育され、大都市の食肉工場で処理加工されるのが伝統的な形態であったが、現在はグレートプレーンズに立地移動した。これは、オガララ帯水層の地下水に依存した大規模灌漑農業が1980年代以降に発達し、

フィードロットとよばれる企業的な肥育場で、肉牛の肥育が行われるようになったためである(矢ヶ崎、2010)。グレートプレーンズについては、Google Earthなどを用いて、空中写真を確認させてみるとよい。広大な大地一面に広がるタウンシップ・レンジ方式の方形測量によって生み出された正方形の地割と、センターピボット灌漑装置の円形の農業景観に驚く生徒は多い。

「**●アグリビジネス企業の台頭**」の**設問9**では、アグリビジネス企業の活動を具体的に理解させたい。遺伝子組み換え品種の安全性について言及したい。アグリビジネス企業は、種子や肥料、農薬の研究開発および、農業機械の製造や貸し出し、農産物の加工や流通、販売などといった農業関連部門に進出している。なかでも、近年は遺伝子組み換え品種の開発や種子ビジネスを手がけるアグリビジネス企業の台頭が著しい。

今日、市場に流通している遺伝子組み換え品種の安全基準は、ラットに遺伝子組み換え品種を3か月間与え続けても問題がないという実験をもとにしている。人間の寿命を80歳とすれば、ラットの3か月は人間の10歳にしか相当しない。この程度の実験期間では、遺伝子組み換え品種が本当に安全なのか、気になるところである。

最近、日本でも公開された『世界が食べられなくなる日』(ジャン＝ポール・ジョー監督、2012)は、遺伝子組み換え品種、ひいては食の安全について考察させるうえで、格好の教材となる。この映画は、フランスで2009年から2年間に渡り、ラットのエサに遺伝子組み換えとうもろこしと農薬を、いくつかの組み合わせで混ぜて与え続けるという動物実験の記録である。実験の結果、ラットの腫瘍の発生率、死亡率の上昇が顕著にみられた。遺伝子組み換え品種の安全性に大きな疑問が呈されたわけである。

日本はとうもろこしの世界最大の輸入国である。その量は年間約1,600万tに達し、約9割がアメリカ合衆国産で、その88%が遺伝子組み換え品種である。また、大豆も年間約300万t輸入されており、約7割がアメリカ合衆国産で、その93%が遺伝子組み換え品種である。つまり、日本は遺伝子組み換え品種の輸入大国なのである。

TPP参加を表明し、農業を取り巻く環境が大きく変わろうとしている日本において、食の安全について改めて生徒に問いかける必要を感じている。

■参考文献

- ・二村太郎「豊かな国の不平等と貧困」矢ヶ崎典隆編『世界地誌シリーズ4 アメリカ』2011 朝倉書店
- ・矢ヶ崎典隆『食と農のアメリカ地誌』2010 東京学芸大学出版会
- ・矢ヶ崎典隆「アメリカ合衆国のエスニック社会」山下清海編『エスニック・ワールド—世界と日本のエスニック社会—』2008 明石書店
- ・矢ヶ崎典隆「アメリカ合衆国—多様性と統一性に着目した地誌—」矢ヶ崎典隆編『地理学基礎シリーズ3 地誌学概論』2007 朝倉書店